

## アスパラガスの柵板式高畝栽培： 香川県発の技術で安定・省力生産の実現を目指す

わが国のアスパラガス生産は露地と施設で出荷量の約半分をそれぞれ担っています。施設（雨よけハウス）を用いると茎枯病を防ぐことができることから西日本を中心にハウス栽培の導入が進みましたが、蒸し暑いハウス内での収穫および防除管理作業を強いられることとなりました。茎枯病は北海道でも一部見られているため東日本にもハウス栽培の導入が進むかもしれない一方、導入コストの高さや作業性の悪さから株の更新時期を契機に栽培からの撤退が進むことも懸念されています。そこで、アスパラガスのハウス栽培で安定化と省力化を同時に実現している香川県独自の技術「柵板式高畝栽培」（写真1）をわが国の他の産地で応用可能とするため、令和2年度から共同研究を開始しました。

### ☆ 技術の概要

1. 生研支援センターの「イノベーション創出強化推進研究事業（JPJ007097）」で北海道・秋田県・長野県・茨城県・静岡県・香川県・広島県・福岡県・長崎県・熊本県に柵板式高畝栽培試験圃を設け、見て実感できる体制を構築しました（令和6年度終了予定）。
2. 40～60cmの高さの客土を柵板で支えて2mほどの幅の通路を確保し、畝の上底に株間30～40cmで一条植えます。このことで水はけと風通しが良くなり病気が発生しづらい環境と作業性の向上が両立します。写真2は通路幅が1.5mのやや狭い例です。
3. 高畝導入のコストで収益を損なわないためには3t/10aほどの収量が必要と考え、品種選定や管理技術等の検証等を行っています。これまでに、九州・四国等の温暖地に限らず長野県塩尻市の試験地（写真3）でも3t/10aに達する品種が見い出されています。

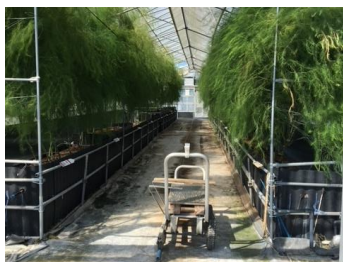


写真1 香川県農業試験場の柵板式高畝栽培試験圃



写真2 農研機構野菜花き研究部門（茨城県つくば市）の試験圃



写真3 長野県野菜花き試験場の試験圃（奥は1棟3畝の平畝区）

### ☆ 活用面での留意点

1. 真砂土、灰色低地土、黒ボク土、褐色森林土で高畝を造成したところ、高畝の施工にかかるコスト（客土の購入・搬入・畝成型）の幅が大きいことが分かりました。堆肥を用いた増量等も含め、地域内でよく検討することが導入コストの低減に重要です。
2. ご質問は、農研機構HPのお問い合わせフォームからお寄せください。

（農研機構 野菜花き研究部門 露地生産システム研究領域 柳井洋介）